

1 試 験 名 落花生「おおまさり」と「おおまさりネオ」の比較実証試験

2 背景・目的 落花生新品種「おおまさりネオ」は、「おおまさり」に代わる品種として千葉県が育成した極大粒の落花生で、令和3年から一般生産・販売開始されている。そこで、千葉市における「おおまさりネオ」と「おおまさり」の生育及び収量について比較実証試験を実施する。

3 試 験 概 要

(1) 供試品種 「おおまさり」、「おおまさりネオ」

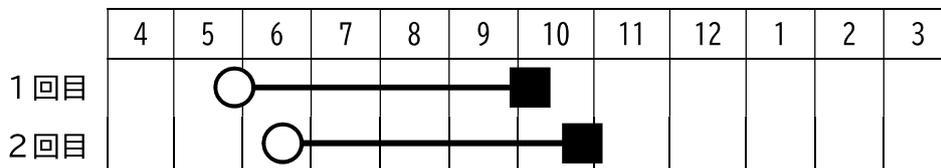
(2) 試験方法

品種		おおまさり	おおまさりネオ
播種日	1回目	5月25日	
	2回目	6月17日	
施肥 (10a 当たり)		落花生専用化成 5-15-20 60kg 炭カル 30kg	
畝幅	65cm	65cm	
畝間	65cm	85cm	
株間	40cm	30cm	
マルチ規格※1	95×200	#9230	
播種粒数/株	1粒	1粒	

※1 生分解性マルチ使用

(3) 調査項目 株姿の違い、播種日及び品種ごとの収穫量(10a 当たり)

(4) 栽培歴 ○：播種、■：収穫（開花後90日）



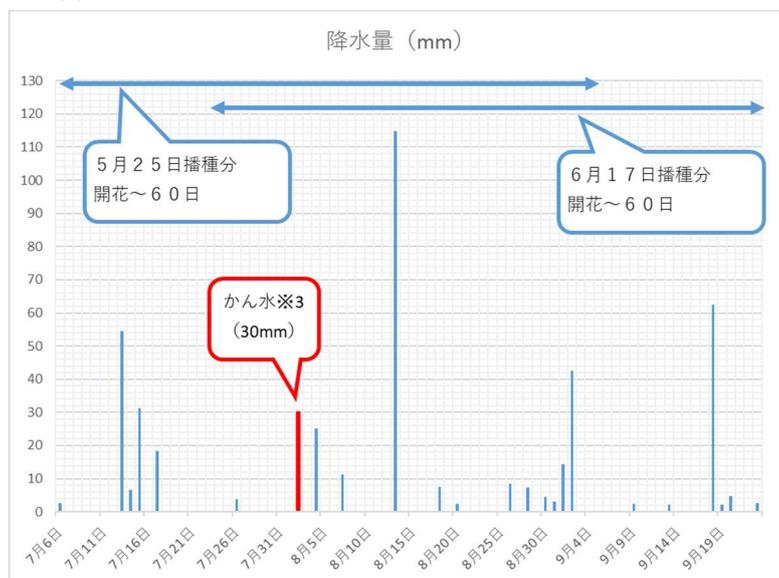
4 結 果

(1) 試験結果

播種日	(1回目) 5月25日		(2回目) 6月17日	
品種	おおまさり	おおまさり ネオ	おおまさり	おおまさり ネオ
株数 (10a 当たり)	1,923 株	4,444 株	1,923 株	4,444 株
発芽率	90.5%	92.2%	87.7%	91.6%
発芽日	6月1日	6月3日	6月23日	6月24日
開花日	7月6日	7月6日	7月25日	7月25日
かん水日	8月2日	8月2日	8月2日	8月2日
かん水量	30mm	30mm	30mm	30mm
収穫調査日	10月4日		10月26日	
収穫量※2 (10a 当たり)	1,135kg	1,489kg	881kg	1,056kg
1株当たりの 莢数(平均) ※2	79	38	57.3	33.9

※2 莢の大きさ、病気や食害の有無、維管束の凹凸具合から子実の熟度を判断し、出荷に値する莢のみを収穫物として集計した。

(2) 開花後60日間の水管理



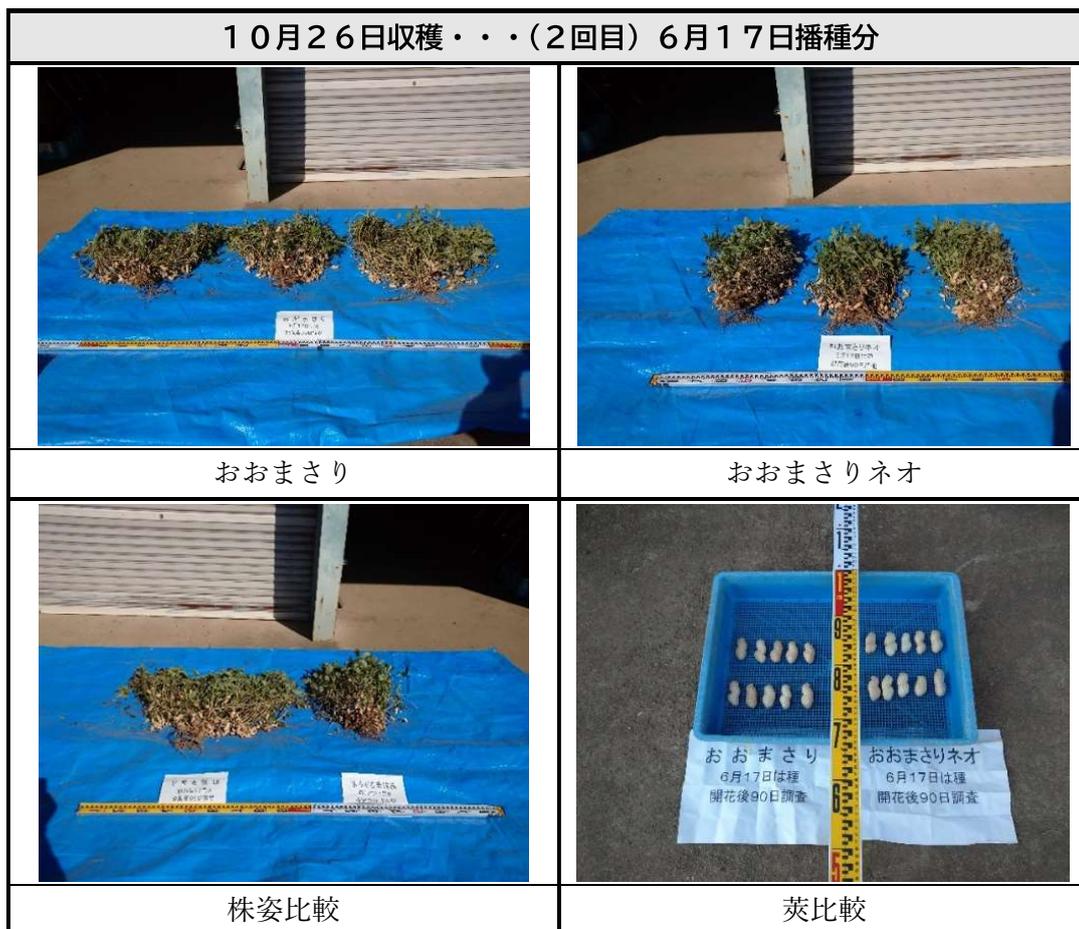
※3 かん水は、8月に入り1度だけ実施した。(30mm) その後は定期的に降雨があったため、かん水していない。

(3)管理作業

除草		病害虫防除		
時期	薬剤名	時期	病害虫名	薬剤名
5月25日	トリアリサイド 粒剤	5月23日	コガネムシ	日農フォース
		5月24日	種子鳥食害	ビゲンR2 70アブル
		7月20日	ハスモンヨウ	ゼンターリ顆粒水和剤

(4)収穫時写真

10月4日収穫・・・(1回目)5月25日播種分	
	
おおまさり	おおまさりネオ
	
株姿比較	莢比較



5所 感

- (1)株 姿 「おおまさり」は、草丈が高く、横への広がりも大きい。一方で、「おおまさりネオ」は、草丈は同程度だが、横への広がり小さいことが特徴である。(参照：4(3)株姿比較) このため、「おおまさりネオ」の方が、「おおまさり」と比較して、約2.3倍の密植が可能である。
- (2)収 穫 「おおまさり」は、隣接する株同士で地上部及び子実が絡み合い、乱暴に子実が落下してしまうため、慎重に掘り取る必要があり、作業が難航した。「おおまさりネオ」は、その株姿から、隣接株同士で絡み合うことはなく、容易に収穫可能であった。
- (3)収 穫 量 「おおまさりネオ」の1株当たりの莢数について、「おおまさり」と比較して、1回目の収穫では約0.48倍、2回目の収穫では約0.59倍であった。(参照：4(1)試験結果 1株当たりの莢数(平均))
- 「おおまさりネオ」の収穫量について、「4(1)試験結果 収穫量」から、1回目の収穫では約1.31倍、2回目の収穫では約1.19倍であり、

「おおまさり」よりも多い結果であった。

また、5月25日に播種した1回目よりも、6月17日に播種した2回目の方が、収穫時にコガネムシやヒョウタンゾウムシによるものとみられる食害が多く、収穫量は少なくなった。

収穫物については、「おおまさり」及び「おおまさりネオ」にほとんど差が無かった。（参照：4(3)莢比較）

(4)その他栽培管理

1回目の播種（5月25日）と同時に、カラスによる種子の掘り起しを抑制するため、ほ場の周囲にテグスを設置した。その後、8月の灌水設備設置と同時に撤去した。この間、鳥類による被害は発生しなかった。

7月中旬頃から、ハスモンヨトウによる葉の食害が見られるようになり、「ゼリターリ顆粒水和剤」で防除を実施した。その後、被害が拡大することは無かった。

8月中旬ごろから、獣による莢の掘り返しが見られるようになったため、電気柵を設置した。その後、収穫までの期間、継続した結果、外周に足跡は見られたものの、ほ場内へ侵入した様子は見られず、電気柵設置による害獣の抑制効果があったと考える。また、足跡の周辺に動体感知カメラを設置したが、獣の姿を捉えることはできなかった。

